

原告の意見陳述

2014年2月5日

私の夫は、平成22年12月8日現在の日本郵便株式会社さいたま新都心郵便局の4階から飛び降り亡くなりました。51歳でした。郵便屋さんと呼ばれる夫は20年以上岩槻郵便局で働いていましたが、平成18年5月にさいたま新都心郵便局へ異動になりました。辞令の出たそのとき夫が「辞めるかもしれない。新都心だよ、一番行きたくないところだよ」と私の携帯に電話をしてきたのを覚えています。それでも、地図を購入し、早く道を覚えようとする姿も見ました。なんとか慣れようと努力していました。しかし、46歳という年齢で大規模な局ノルマや時間の管理、人間関係の希薄さなど余りにも前の職場との違いに疲れ切っていたようでした。本来明るく健康な夫が4年の間に3回も病気休暇を取る状況になってしまいました。「とにかくきつい。上からミスるな、事故るな、残業するなと言われ毎日頭の禿げる思いだ」と言っていました。自分の能力に合った所に転勤したいと夫は毎年職場に出す意向調査で転勤を希望していました。直接上司にも何回も転勤させて欲しいと訴えていました。結局希望は通らず、新都心で亡くなりました。亡くなる当日の朝、私は駅まで送っていき、駅の階段をお互いに見えなくなるまで手を振っていたのですが、それが私の最後に見た夫の生きている姿になってしまいました。それからは、自分を責める毎日でした。つらいのを分かっていたのに助けてあげなかった。辞めさせればよかった。私が夫の身代わりになれば良かったとも思いました。

そんな中、仕事が原因で亡くなったのではないか、新都心に転勤しなければ病気になるかという思いもあり、相談することとなりました。

当時小4の娘が「後悔している」と言っていました。何故か聞くと12月8日の朝、夫と他愛のない会話をしたそうですが、その時に「仕事に行ったら、高い所に気を付けてねと言えよよかった。そうすればお父さんは落ちて死ななかつたのではないか」というものでした。子供が自責の念を持っている事に申し訳なく思いました。

お父さん何で落ちちゃったのかな。誰かがお父さんの事押したのかなと言っていました。その時は違うよと答えましたが、その通りではないかとも思えました。何故ならば、夫は何度も上司達に助けを求めていました。自分の能力では新都心で働き続けるのは無理、早く転勤させて欲しい。うつ病という病気になったのが新都心への転勤が原因であるのに、同じ環境に戻されてしまいます。私からしてみれば夫を窓際めいっぱい追いつめて、落とされたと思っています。

夫が亡くなった後、新都心で働いている方と話す機会がありました。人がひとり自死という形で亡くなっているので、職場も少し変化があったのではないかと思いたかったです。しかし、思わぬ返事が返ってきました。「誰か(職場環境が)良くなったと言っていたか？

良くなるどころか反対に酷くなっている」というものでした。とても悲しくなりました。大切な家族、中心的な存在であった夫が死んだのに、新都心郵便局は何とも思っていなかったということでした。

平成13年、夫が亡くなる9年前にも同じように窓から飛び降り亡くなった方がいると

聞きました。本来であれば一度そのようなことが起きたのであれば、再発防止など講じるのではないのでしょうか。その方の遺族が何も訴えなかった事をいいことに何もしなかったのではないのでしょうか。神戸の郵便局でも先日パワハラが原因で自死をした遺族が神戸地裁に提訴したという記事を読みました。同じ様な事がほかでも起きています。

夫が急に亡くなり、現実を受け入れられないまま、ひとりで小学生の子供3人を育てなくてはならず、仕事に行く電車の中でもボロボロ涙を流しながら通勤しました。精神的にもきつく、夜になると言いようのない不安感、恐怖感があり激しい動悸や過呼吸になることもありました。あまりの苦しさに救急車を呼んでしまおうと思ったこともありました。何とか呼吸を整えて落ち着いた後も、辛い悲しい苦しいという思いが続きました。静かな夜が怖くつい最近まで、音楽を聴きながらではないと眠れませんでした。

私が裁判を決めた理由として、子供たちにお父さんは悪くない。そして、働くことは大切なことと伝えたいためです。薬を飲みながら働き、そして亡くなりました。このままでは働くということがばかばかしくなってしまうのではないかと心配しました。また私のように悲しむ人を一人でもなくしたいと思いました。そして、今現在働いている人、これから社会に出ていく人が、病気にならない、病気にさせない職場環境に近づいてほしいという願いがあります。健康で働くという事、ただいまと家族が帰って来ることが当たり前になってほしいと願います。